



1

分野5 研究開発課題(1)

「格子QCDによる物理点での バリオン間相互作用の決定」

筑波大学・計算科学研究センター 理化学研究所・計算科学研究機構 藏増 嘉伸





Outline

§1. はじめに

§2. 課題の概要

藏増班と核力(初田)班

§3. H24年度の進捗

§4. H25年度の計画

§5. まとめ



§1. はじめに



※重力の効果は無視できるほど小さい

電磁相互作用による化学結合 炭素原子 ダイアモンド結晶構造 ~10^{−10}m Ó 電子 強い相互作用 核子 原子核 クォーク 陽子 中性子 3 **~**10^{−15}m



格子QCD



QCD Lagrangian = 第一原理

$$\mathcal{L} = \frac{1}{4} F_{\mu\nu} F_{\mu\nu} + \sum_{q=u,d,s,c,b,t} \bar{q} \left[\gamma_{\mu} (\partial_{\mu} - i g A_{\mu}) + m_{q} \right] q$$

結合定数gとクォーク質量m_qはフリーパラメータ



カの強さが大きく摂動計算では本質がわからない ⇒ 第一原理に基づいた非摂動的数値計算によって定量的に解析





数值計算手法(1)



QCD Lagrangian

4次元(空間3次元+時間1次元)連続理論における経路積分

$$\langle \mathcal{O}[A_{\mu}, q, \bar{q}] \rangle = \frac{1}{Z} \int \mathcal{D}A_{\mu} \mathcal{D}q \mathcal{D}\bar{q} \ \mathcal{O}[A_{\mu}, q, \bar{q}] \ \exp\left\{-\int d^4x \mathcal{L}[A_{\mu}, q, \bar{q}]\right\}$$

統計力学における分配関数との類似性 ⇒ モンテカルロ法

計算機にのせるために自由度を有限化 ⇒ 4次元時空を離散化(4次元格子)





数值計算手法(2)



4次元格子上における経路積分

$$\left\langle \mathcal{O}[U_{\mu}, q, \bar{q}] \right\rangle = \frac{1}{Z} \int \prod_{n, \mu} dU_{\mu} dq d\bar{q} \ \mathcal{O}[U_{\mu}, q, \bar{q}] \ \exp\left\{-\sum_{n} \mathcal{L}_{\text{latt}}[U_{\mu}, q, \bar{q}]\right\}$$

統計性からクォーク場はグラスマン数(反可換) ⇒ 解析的に積分

$$\langle \bar{\mathcal{O}}[U_{\mu}] \rangle = \frac{1}{Z} \int \prod_{n,\mu} dU_{\mu} \ \bar{\mathcal{O}}[U_{\mu}] \ \exp\left\{-S_{\text{latt}}^{\text{eff}}[U_{\mu}]\right\}$$

物理演算子の期待値はゲージ配位に関する平均

$$\begin{split} \langle \bar{\mathcal{O}}[U_{\mu}] \rangle &= \frac{1}{N} \sum_{i=1}^{N} \bar{\mathcal{O}}[U_{\mu}^{(i)}] + O\left(\frac{1}{\sqrt{N}}\right) \\ & \text{ $\widehat{\kappa}$ it is \widehat{E}} \end{split}$$



物理的パラメータ



数少ないパラメータ

- 4次元体積: V=NX•NY•NZ•NT
- 格子間隔: a(結合定数gの関数)
- クォーク質量: m_u,m_d,m_s,...





§2. 課題概要(藏増班)



◆物理点での1+1+1フレーバー格子QCDシミュレーション

- □ u,d,sクォーク質量の決定と基本物理量の測定
 - 電磁相互作用とu-dクォーク質量差の導入
- □ 既知の共鳴状態の解析と新しいクォーク複合系の探索
- □ 軽原子核の直接構成
- ◆ メンバー
 - 石川健一(広島大), 石塚成人(筑波大), 谷口裕介(筑波大), 浮田尚哉(筑波大), 山崎剛(名古屋大), 滑川裕介(筑波大)

◆ 役割分担

- □ K computer向けコード最適化:石川
- □ 共用開始前各種テスト:石川,浮田
- □ ゲージ配位生成:浮田,滑川
- □ 基本物理量測定:浮田,滑川
- □ 共鳴状態・新奇クオーク複合系:石塚
- □ 軽原子核構成:山崎

◆ 定例meeting

課題1メンバー全員による情報交換・進捗状況報告を2週間に一回開催



課題概要(核力班)



◆ 物理点でのバリオン間有効相互作用の決定

- □ 現実的核力の決定
- □ 現実的ハイペロンカの決定
- □ 3体力の解明
- □ Exotic hadron候補

H-dibaryon, X(3872), Z(4430), Θ⁺, Λ(1405), etc.

◆ メンバー

初田哲男(東大/理研), 石井理修(筑波大), 佐々木健志(筑波大), 土井琢身(理研), 根村英克(筑波大), 村野啓子(理研)

核力

◆ 役割分担

- □ 核力:石井,村野
- □ ハイペロン力:根村,佐々木,井上
- □ 3体力:土井

中心力・テンソルカ 奇パリティー核力 三体力 (偶パリティー) LS 力





両班の連携のコアパート





11









- 計算コストの主要部分
 - 大規模疎行列に対する線形方程式を倍精度で"ひたすら"解く
 Dx⁽ⁱ⁾=b⁽ⁱ⁾
 - Dは12•V(~10⁹)次元の複素非エルミート正方行列
 - 各行には51個の非ゼロ要素しかない
 - 要求B/F值:約2.1(DP)
 - [A]でのコストは約80%, [B]ほぼ100%
- チューニング状況
 - 線形方程式求解部分(精度混合型nested BiCGStab)に注力
 - Weak scaling: $92\%(16 J F \Rightarrow 12288 J F)$
 - 実行効率:25%



§3. H24年度進捗状況



※昨年度の本シンポで報告した計画に対する達成度

◆藏増班

☑ <u>共用開始前はゲージ配位生成のための各種テスト</u>

☑ <u>共用開始後はゲージ配位を生成開始</u>

⇒ 並行して基本物理量測定・軽い安定原子核の構成

- ◆核力(初田)班
 - ☑ 共用開始前は2体・3体バリオン間力計算のためのコードの高度化と実 証テスト
 - □ 共用開始後は生成されたゲージ配位を用いて中心力・テンソル力を含めた2体バリオン間力の系統的計算を開始



ゲージ配位生成と基本物理量測定



- ハイブリッドモンテカルロ法によるゲージ配位生成(H25年度も継続)
 2+1フレーバー(m_u=m_d≠m_s)QCD
 格子サイズ:96⁴,格子間隔:~0.1fm
- 数%の範囲内での物理点ヘチューニング済





1+1+1フレーバーQCD+QED



PACS-CS 12

アイソスピン対称性の破れ

- 電磁相互作用 $Q_u = +2/3e, Q_d = Q_s = -1/3e, e = \sqrt{4\pi/137}$ - u-dクォーク質量差 $m_u = m_d \neq m_s (2+1) \rightarrow m_u \neq m_d \neq m_s (1+1+1) \cup (-1)$

Physical input:

 $m_{\pi^+}(ud), m_{K0}(ds), m_{K^+}(us), m_{\Omega^-}(sss)$

Output:

m_u, m_d, m_s, a(格子間隔), m_n-m_p, ...





Reweighting法



16

Simulation parameter: m Target parameter: m'

$$\langle \mathcal{O}[m] \rangle_m \Rightarrow \langle \mathcal{O}[m'] \rangle_{m'}$$

$$\begin{split} \langle \mathcal{O}[m'] \rangle_{m'} &= \frac{\int \mathcal{D}U \mathcal{O}[m'] e^{-S[m']}}{\int \mathcal{D}U e^{-S[m']}} \\ &= \frac{\int \mathcal{D}U \mathcal{O}[m'] e^{-S[m] - (S[m'] - S[m])}}{\int \mathcal{D}U e^{-S[m] - (S[m'] - S[m])}} \\ &= \frac{\int \mathcal{D}U \mathcal{O}[m'] e^{-S[m] - \Delta[m',m]}}{\int \mathcal{D}U e^{-S[m] - \Delta[m',m]}} \\ &= \frac{\langle \mathcal{O}[m'] e^{-\Delta[m',m]} \rangle_m}{\langle e^{-\Delta[m',m]} \rangle_m} \end{split}$$

パラメータmで生成したゲージ配位を使ってパラメータm'での 期待値を計算することが可能 ※等式変形だが現実問題として補正が小さい方が良い



T2Kでの先行研究



PACS-CS 12



Fit結果4.54(1.09) MeVは実験値3.937(28) MeVと誤差の範囲で一致







PACS-CS 12

Physical input:

m_{π+}(ud)=139.7(15.5) [MeV] m_{K0}(ds)=497.6(8.1) [MeV] m_{K+}(us)=492.4(8.1) [MeV] m_Ω(sss)は実験値に固定 exp: 139.6 [MeV] exp: 497.6 [MeV] exp: 493.7 [MeV] exp: 1672.5 [MeV]

課題:QCD+QEDシミュレーションでは大きな有限体積効果が予想される π中間子(140MeV)@QCD ⇔ フォトン(質量ゼロ)@QED

⇒ 京を用いたより大きな格子サイズ964でのシミュレーション 核力・ハイペロンカの計算にも利用可能



原子核の直接構成



Yamazaki-YK-Ukawa 12

2+1フレーバーQCD, m_{π} =0.5 GeV, m_{N} =1.32 GeV



|ΔE(³S₁)| > |ΔE(¹S₀)| ⇒ 質量を軽くして行くと(先に)¹S₀の束縛が解ける?



核力計算の進捗状況



◆ 現実的核力の決定 負パリティおよびスピン軌道力の計算

◆現実的ハイペロンカ 結合チャンネルハイペロンカ (S=-1, -2, -3, -4)

◆ Exotic hadron候補 フレーバーSU(3)極限におけるH-dibaryonのクォーク質量依存性

◆3体力

直線配置による近距離斥力の導出

「京」向けコードの高度化を行いつつ, 「京」以外で重いクォーク質量を使ったベンチマーク的計算が進行中



核子間ポテンシャル



21



格子QCDによる波動関数計算 ⇒ ポテンシャルの決定

核力の決定







定性的な振る舞いは一致。実験値との差はクォーク質量が重いことが原因 $m_{\pi} \simeq 1.1 \text{GeV}, m_{N} \simeq 2.2 \text{GeV}$



ハイペロンカとH-dibaryon状態







3体力



- 3体力:現代原子核物理における最重要課題の一つ
 - 原子核の束縛エネルギー
 - 高密度物質の状態方程式・中性子星の物理
 - 超新星爆発•元素合成
- 格子QCDでの「挑戦」: <u>極めて大きな計算コスト</u>
 - ブレイクスルーを達成(2012)! [unified contraction algorithm]
 - Wick縮約とカラー・スピノル縮約を統一的に扱うアルゴリズムの開発
 - 劇的な速度向上: ×192 for ³H/³He, ×20736 for ⁴He, ×10¹¹ for ⁸Be







§4. H25年度の計画



重点課題追加配分枠申請が認められたとすると、、、

◆藏増班

□ H25年度中に目標とする5000分子動力学時間の統計を得ることが可能
 □ 更にreweighting法を用いて1+1+1フレーバーQCD+QEDシミュレーションを実行 ⇒ u, d, sクォーク質量の決定

◆核力(初田)班

□保存されたゲージ配位を用いて2体バリオン間力の系統的計算を実行 最初は中心力・テンソルカに注力





BACKUP